

Parents in Modern America

by Le Masters

The Dorsey Press 1974 Revised Edition



江波 諄 子

私のアメリカでの恩師、ハリス教授から、先週一冊の本が届きました。「現代アメリカの親たち」と題する二百ページ余りの本で、大変よく書かれているという評がそえてありました。一九七〇年に初版され、今年の一月に改訂版として再版されたものです。今回は皆様と共にこの一冊の本のページをめくってみることにいたしました。

この本は、現代のアメリカの親の問題を中心に社会学的なアプローチをしたもので、あくまでも心理学的、精神病的な見方をしたものではありません。

親であることのむずかしさは、実際に子どもを育てたことのある人でなければわからないかもしれませんが、脳に近いコンピュータを考え出した有名な数学者の Norbert Wiener も、一言、親であることの神秘さと複雑さをもたらしていることを聞きますと、また、どうして女性は学校ではベテランのすばらしい教師に成り得ても、家庭では愚かな母親になってしまうのだろうかという疑問を投げかけられますと、あらためてそのむずかしさを感じ入るようになります。

著者はまず第一章で、Kingsley Davis (1940) がアメリカの親の問題としてあげた十一の特徴や局面を紹介して

ます。それらを要約してあげますと、(本全体を通して項目別に問題点を番号をうって羅列しているのが、いかにもアメリカ人らしいのですが)

1、社会の変化の割合が激しいほど、親は子どもとの間に問題を多くもち、ゆっくり変化する社会の方が世代のギャップが少ない。

2、子どもの発達が急激に大きく変化している時に、親のそれは減少していたりする。(たとえば、性への関心など)

3、身体的、心理的な結合が、親と子ども間で異なる。

4、大人は現実主義であるのに対して、子どもは理想主義である。

5、親の一方的な権威は、子どもに人生のただひとつの面のみを触れさせることになるので、賢い親は子どもへの権威をできるだけ制限する。しかし一方、子どもが大人になるまで、子どもの全生活の責任をとらねばならない。

6、道徳とか、よい行いとは何か、の内容が世代間でも世代内でも異なる。

7、親のみならず、学校、マスコミ、仲間がそれぞれに子

どもに対して権威をもつ。

8、社会の法律や規則や組織によって、子どもとしての年齢規定が異なる。(日本でも児童とはの定義が場合ににより異なります)

9、核家族の中では、権威やそういうことに関する感覚が大家族制の中より拡散されないので、親と子どもの緊張感を生み出す。

10、親は子どもにどんな役割を教えてやればよいかかわからず、将来子どもがどんな社会に住むか理解しかねる。

11、性の緊張。

以上の十一を現代の親の問題として分析しています。この十一の中に、この書物の中でこれから追求していくポイントがほとんど出て来ていると考えてよいでしょう。

親であることのむずかしさを考える場合、いつの時代でもそうですが、殊に現代において大きな原因になっているものとして、急激な社会の変化があげられるでしょう。社会変化の中には、もちろん親であることの困難さを軽減してくれるプラスの面(たとえば、医薬の進歩、物質的に豊かになったこと、より進んだ避妊法など)もありますが、それ以上に親をして役割をますますむずかしくさせること

になった社会の変化がたくさんあります。たとえば、現代の親は昔よりも、子どもや専門家や先生やソーシャルワーカーによって、また時には自分自身によってずうっと高い要求水準の中で親であることを望まれております。(昔は、自分以外の親仲間によってのみしか評価されませんでした)つまり、親であることの質的要求があがっているということでしょう。その上、昔の親は子どもを生理的、社会的によく育てることで、十分親としての役割を果たしたことになりますのに、今は親より、よりすぐれて子どもを育てるのがあたりまえのように考えられています。したがって、親が自分自身にとってネガティブ Negative な自己像をつくり出すこととなります。また、アメリカ社会には、子どもというものは、貴重なものとして考えられる一方、親や年寄りについては、消耗するものと考えたりして、価値を低くおく傾向があります。Negative な面はまだあります。家庭面の問題としては、親になる十分な準備もできていないままの若い親がふえ、家庭の主婦は、前よりずっと多く家庭外に役割をもつようになり、結婚生活に以前ほど永続性がなくなり、離婚率は毎年ふえる一方です。社会との関連でみますと、子どもの養育に関して、専門家と相

談することが多くなりましたが、実はその専門家の説く養育方法も十年ごとぐらいに変わり、特に、科学的な人間行動の解釈の仕方は、実際のところそれほど親の役には立っておりません。しかも、一方ティーンエイジ世界といわれるような若者のグループや、マスメディアの広がりによって、子どもはその中で、自身のアイドルや音楽や着るものや言葉をもっており、親の監視の目は届かなくなる一方で、こうしたグループと触れ合うことさえ大変むずかしいのです。著者は、ある意味でアメリカの国自体がもはや田舎的な社会ではなくなってしまったといえます。それなのに昔農業に多くの人が従事していた時につくられた学校の制度(たとえば農繁期のための長い休暇など)が依然とあり都市化された社会に生きる親には時々苦痛にもなるといえます。

第二章以下、十二章までありますが、そのうちで私たちが身近に感じられる興味深い章は、四章(親であることの役割分析)、十章(親、マスメディア、若者のグループ)、十一章(親と社会変化)でしょう。それで、これらの章をさらにご紹介したいと思います。第一章で問題提起されたことがより細かく話されているようです。

第四章では親であることの役割分析として、十三に分けて話していますが、ここでは続けてまとめてみましょう。

現在の段階では、親としての役割はよく定義されていない中で、親は自分なりに親としての役割をそれぞれとっているわけですが、過去十年間に親の権威は減ったものの、責任のみは重くのしかかっています。親は不適當な行動科学的犠牲者で、たとえ専門家が失敗しても、親は成功するよう期待されますし、第一章でも述べられたように、親としての役割の要求水準がずうっと高くなっています。その上、当然のことながら、親は自分の子どもを（たとえ養子であっても）選ぶことはできません。これは昔とかわっておりませんが、親への要求が高いためたとえば中産階級の親はその子どもの学力や能力にかかわりなく、少なくとも大学教育は受けさせ、卒業させることを社会的にも何となく期待されます。昔なら、学校に興味がなかったら、家や親戚の商売を手伝うとかして、親が子どもの職業についてかなり自由に介入し、方向づけることができましたが、今はそういうわけにはいきません。また、現在では働く母親がふえ、世の企業は彼女たちがいなかったら非常に困るのに、もしも彼女らの子どもに何かおこった場合に、社会は

それほど同情的ではありません。しかしながら、それでも仕事はどうしてもいやでしたら離れることができますが、親としての役目はこの世で退くことのできない少数の重要な役割のひとつです。親自身への高い要求、社会からの親として以外の別の役割要求、そうした中で現代家庭の親は従うべき古い伝統的な家庭の姿もなく、そしてそれに代わるべき新しい家庭のモデルもありません。見よう見まねで親であることの役割をとらうとしております。

次に、十章で述べられているマスメディアや若者たちのみのグループの動きは、現在の日本でも同様に私たちの大きな関心事のひとつです。著者は数字によって、いかに子どもがマスメディアの代表的なもの、テレビによって影響を受けているか示します。試みにご紹介しますと、アメリカには十八歳以下の子どもが七千万人いて、そのひとりひとりが高校卒業するまでにテレビを見る時間の平均総数は二万二千時間、それにくらべて学校で受ける授業は一万一千時間だそうです。暴力もののテレビ番組が多い中で、子どもは十四歳までに一万八千人もの人間が殺される場面を見ることになるかと報告しています。マスメディアによって、若者の価値観は大きく影響を受け、その特色はたとえば、

性や暴力についてゆるんだ考え方をし、未成熟なことを理想化したり、物質主義、快楽主義などとしてあらわされています。

もちろんテレビは、簡単には得られない貴重な知識を画面から与えてくれますが、子どもばかりでなく大人をも惑わせてしまうテレビの力にもう少し気づき、おしとどめる必要性を強く説いています。たとえば、テレビの画面上では、頻繁にタバコをふかしたり、お酒をのんでいる宣伝があり、また優雅な旅への誘いをいたします。しかし決して画面では誰も肺がんにはならないし、ビールをのんでも太らないし、旅にお金を使っても破産することはありません。このように画面の裏に潜む現実の問題を教えないままに、ただ商業ベースのつて若者をあおりたてるところに親として大いに憂うる点がマスメディアの中に潜んでいます。こうしたものの考え方を自分たちのみの世界にたやすくとり入れる若者に親は戸惑うばかりです。

最後に第十一章では、これまで何度も述べられてきた社会変化をさらに詳しく分析しております。その特質といいますが、概念規定を次のようにしています。

- 1、社会変化は、社会の進歩や悪化と同義でない。

2、社会変化の割合は常に一定していない。

3、社会変化は人々にとって一様でない。

4、社会変化はいつも計画だつて行われぬ。

5、社会変化によっておこる結果は、しばしば前もって予想されない。(たとえば、自動車の普及によって親は子

どものデイトの監視ができなくなった)

6、社会変化は、望まれてでなく無理やりにやってくる。

それうまく対処できる親とそうでない親がある。

7、社会変化が起こった後、前の状態にはもどれない。

(たとえば、離婚率は増える一方である)

この他、この書物の中では、社会階層の問題、人種的少数グループの問題、片親の問題、親とのカウンセリングなどを章としてとりあげています。

総じて現代の親であることの中にひそむさまざまなむずかしさの原因を分析し詳しく説明することに終わっているようです。しかしながら、その分析は大変鋭く、わかりやすく、身のまわりをふりかえるとどれもこれも納得のいく説明ばかりです。訳も分らず親であることのむずかしさに悩んでいた人々に、何かすっきりとした光を投げかけてくれるような一冊といえます。(十文字学園女子短期大学)